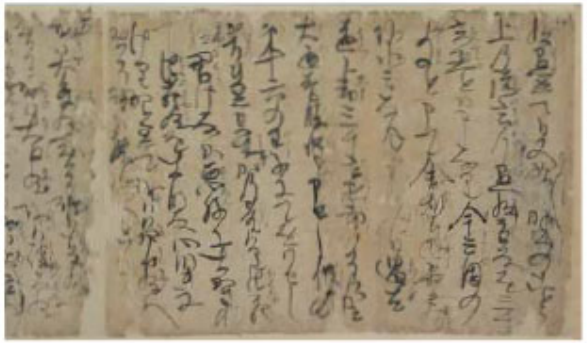
お会式／日蓮聖人の御命日である10月13日を最終日とする3日間にわたって行われる報恩の法会。12日の万燈練供養で有名。

歌川国貞「江戸自慢三十六興　池上本門寺会式」／江戸時代末の本門寺を描いた浮世絵。あまり人出がないので、早朝の様子だろう。



兄弟抄／日蓮聖人が池上本門寺開基、池上宗仲とその家族に宛てた書状。霊宝殿に収蔵されている。

此経難持坂／仁王門に続く96段の石段。加藤清正公が寄進したもので当時の様子を伝える数少ない遺構。名前は『法華経』に由来。

池上本門寺霊宝殿

大堂の西側に建つ霊宝殿には、日蓮聖人御真筆の「兄弟抄」や「妙法尼御前御消息」など貴重な寺宝を収蔵。毎月展示物を変えて公開されています。

●開館日：毎週日曜

※行事等の都合により開館されない場合もあります。
開館時間／10：00～16：00
拝観料／大人300円、子供200円

示しているのです」

加藤清正公が大堂のほか此経難持坂の石段を寄進したのも、慈母の供養のためでした。日蓮聖人の孝道に倣われたのでしょうか。

本門寺の歴史をたどると、徳川家康公の側室のお万の方（養珠院）、徳川秀忠公の乳母の岡部局、前田利家公の側室の寿福院など、多くの女性信者の姿もみえてきます。「お万の方の信仰を周囲の人が見習って広まっていったのです」と梅本さん。『法華経』には女人成仏の教えが説かれていますので、女性の篤い信仰を集めてきました」

江戸時代後半になると、江戸庶民の間で祖師信仰・法華信仰が高まり、池上本門寺の参詣者も急速に増えていきました。日蓮聖人御命日の法要「お会式」には江戸中から人が集まり、大変な賑わいをみせるようになりました。その様子は浮世絵にも描かれているほどです。

今もお会式には数多くの人が訪れ、10月12日の万燈練行列の時には池上の町は身動きもできないほどになります。

総勢約3千人もの人たちにの手よって百数十基の万燈が練っていく様子は、華やかにして荘重です。このページと表紙に写真を掲載しましたが、その迫力と荘重さは体験しなければわかりませんので、機会があればお会式の期間にお参りされてはいかがでしょうか。

お寺巡りをさらに愉しむ！ 仏像の見方 基本の「き」明王編

霊験あらたかな仏様として信仰を集めているお不動様。正しくは不動明王といい、「明王」という種類の仏に分類されます。明王はなぜ恐い顔をして武器を持っているのか、その意味を探ります。

絶大な力で悪しき心を断つ！煩悩を破壊する〝力の御仏〟

「明王」の「明」は真言や陀羅尼といった、仏様の霊験や功徳を表す特別な言葉のことです。真言・陀羅尼は言葉自体が霊力をもっていて、それを唱えるだけで悪しきものを除くといった功徳が得られるとされます。明王はそうした霊力をもっとも自在に使える仏の意味で、どんな相手も打ち負かしてしまうといいます。そして、大日如来などの如来（悟りを開いた者のことで、狭い意味での仏）の命令に従って、この力を人々の救済に用いるのです。

恐ろしい顔をしているのは、優しく教え導いていては言うことをきかない頑なな心の持ち主を、畏怖させて善行に向かわせるためです。武器をもっているのは、欲をおこさせる煩悩を断ち切ることを示しています。腕や脚、目が多いのは霊力の強さの表現です。また、如来や菩薩と違って光背が火焔となっているのも、智慧の炎で煩悩を焼き尽くすことを表しています。

【明王の主な種類】

不動明王（ふどうみょうおう）
動ずることのない守護者

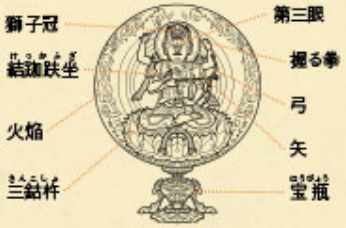
明王の中でも中心的な存在となっている不動明王は、何ものにも動ぜず修行者や仏教徒を守護してくれる明王です。剣と羂索（悪しきものを捕らえる投げ縄）を持つのが特徴で、青黒い肌をもち、弁髪という編んだ髪を垂らしています。

降三世明王（ごうざんぜみょうおう）
過去・現在・未来の勝利者

「降三世」とは過去・現在・未来を降伏（ごうぶく）させる（悪しきものを打ち負かす）という意味です。明王の中でももっとも強力とされる五大明王に不動明王とともに選ばれています。3つの顔と6本の腕をもち、シヴァ神とその妃を踏みつけています。

孔雀明王（くじゃくみょうおう）
やさしい顔をした女性の明王

孔雀は毒蛇も食べることからインドでは毒（煩悩）を消す霊獣とされてきました。孔雀明王はその霊性をもつ明王で、病苦や災害を取り除く功徳があるとされます。明王でありながら菩薩のような姿をしているのは、女性（仏母）であるからです。

愛染明王（あいぜんみょうおう）
愛欲の煩悩を悟りに変える明王

仏教では愛も欲望の源泉であり苦を生み出すものとして煩悩と考えます。しかし、それを否定せず、悟りの力へと変えてくれるのが愛染明王です。真っ赤な体が特徴で、光背も赤く円い火焔光背です。6本腕で獅子の冠をかぶり、宝瓶の上に座します。